

HCC Best Practice



福井県済生会病院放射線科における肝細胞癌治療の取り組み 世界第1号機となる血管撮影装置の導入や 新しいカテーテル，支援ソフトの開発などにより “根治的な TACE”の普及をめざす



Interview

宮山 士郎 先生

福井県済生会病院放射線科主任部長

福井県済生会病院は、北陸で初めて“すべての診療科の画像を放射線科が読影する”という中央放射線診断のシステムを取り入れ、1977年には日本で2番目に全身CT装置を導入するなど、かねてより診断能力の向上に努め、地域に貢献してきた病院である。近年は、がん診療連携拠点病院として低侵襲治療に注力し、癌の手術では各治療科が腹腔鏡・胸腔鏡などを積極的に用いるほか、放射線科ではIVR(画像下治療)やトモセラピーによる強度変調放射線治療(IMRT)を実践。そして肝細胞癌の領域では、世界第1号機となる血管撮影装置や新しいカテーテル、支援ソフトなどを駆使してTACE(肝動脈化学塞栓療法)による根治的治療に力を注いでいる。そこで、同科主任部長の宮山士郎先生から肝細胞癌に対するTACEの実際と今後の展望について伺った。

福井県済生会病院放射線科の概要

放射線科は、他科からの依頼を受け、単純X線撮影、超音波検査、CT、MRI、PET検査などの読影をはじめ、画像を見ながら低侵襲治療を行うIVR(画像下治療)や放射線治療を行っている。現在、同科の常勤医は9名おり、診断IVRグループ6名、核医学グループ1名、治療グルー

プ2名の3つのグループに分かれて診療にあたっている。

同科がモットーとして掲げるのは『過不足のない診断・治療』だ。まず診断IVRグループでは、単純X線写真を含むほぼすべての画像の読影および診断報告書の作成、心・産婦人科以外の超音波検査のほか、IVRでは肝細胞癌に対するTACE(肝動脈化学塞栓療法)や、頭頸部悪性腫瘍に対する超選択的抗癌剤動注、透析シャント拡張術、血管形成術、各種ドレナージ、ステント・下大